

高井伸夫著「労使の視点で読む最高裁重要労働判例

労使の弁護士が説く重要 21 判例の論点と現代的意義」経営書院 2010年5月21日刊を読む

労使の視点で読む最高裁重要労働判例 労使の弁護士が説く重要 21 判例の論点と現代的意義

- 1．人口減少によって消費が目減りし、その結果、産業全体が衰退・斜陽化し、働く場・雇用の場も失われ、賃金ダウン・個人所得の低下が進んでいるというのが、今の日本が直面する新たな問題状況である。そこに新しい複雑な労使問題が登場すれば、新しい労働法理を創出・構築して解決に当たらなければならない。そして、こうした課題を克服するためには、従来の最高裁判所の考え方を今まで以上に、より詳細・緻密に分析する必要があるだろう。まさに、温故知新が本書の眼目なのである。
- 2．社会の様々な事象のひとつである労働事件が、労働側と使用者側からどのようにとらえられ、労働法の発展にどのように寄与してきたか、そして今後の労働判例の展望はどうか、労使の視点を念頭に、生きた勉強の材料を読者に提供できれば幸いである。

P2

[コメント]

「事情変更の原則」を持ち出すまでもなく、日本や世界の社会経済状況は激しく揺れ動き続けている。その中で、原則倒産の企業経営とそこで働く人々の人間としての尊厳をどう確保し続けるか。労働法の目的とは何かを考える上で極めて有益な本書と考える。

- 2010年5月25日 林明夫記 -